

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：82674

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2013

課題番号：25670331

研究課題名(和文)高齢期における新しい就労支援システムの構築

研究課題名(英文)A new working support system in age over 65

研究代表者

深谷 太郎 (FUKAYA, Taro)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手

研究者番号：80312289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者にとって、社会参加はQOLや健康寿命を延ばす為の大切な要素である。しかし、地域との接点のない高齢者、特に男性には社会参加のハードルは高い。よって、就労という形での社会参加を促進するシステムを考案することを目的とした。東京都大田区に開設されたアクティブシニア就業支援センター「いきいきごとステーション」において、求職者を対象とした縦断調査を行った。

その結果、就労支援機関利用者は収入目的の高齢者と生き甲斐目的の高齢者の2種類が存在すると思われる。前者は希望収入の差異等が原因で、求職期間が長期化している可能性がある。また、双方とも社会的孤立および閉じこもりのリスクが高いことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The social participation is an important element to postpone healthy life expectancy and QOL for an elderly person. However, the social participation is difficult for the elderly person, especially of the man, with a little acquaintance in the area. Thus, I devised the system which promoted social participation with working. In an active senior support center for working established in Ota-ku, Tokyo(Ikiiki Shigoto Station), I hold a longitudinal research for jobseekers.

As a result, there were two kinds of the elderly person; one is jobseekers of the income purpose and the other is job seekers of "Ikigai" working. As for the former, a job hunting period may be prolonged for the differences of the difference with hope income and income. In addition, it was suggested that social isolation risk were high with the both.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・衛生学・公衆衛生学

キーワード：保健医療政策 高齢者就労

### 1. 研究開始当初の背景

高齢期においては積極的な社会参加活動が生活機能の維持に肝要であり、所得など社会的要因が健康に影響を及ぼすことから、就労支援が高齢者の社会参加促進策の有益な方法であると言える。我が国の高齢者雇用政策では、2013年4月に施行される高年齢者雇用安定法の改正により65歳までの継続雇用がより強化される。従来より高齢者の就労に関する研究では、個人差を弾力的に認める社会づくりを希望されていること、60歳代後半層では生きがいのために働く者の割合が多いこと、運動能力や健康面と合わせた調査の必要性などが指摘されてきた(労働政策研究・研修機構, 2012)。しかしながら、高齢者の就労支援に関する学術的検討は社会的要請が高い一方、研究実施の困難さから取り組みが遅れている。高齢期におけるライフスタイルが多様化する今日では、従来の社会的・経済的弱者対策としての高齢福祉施策に併せて、いきがい就労を求める高齢者への支援が重要なテーマになっている。

### 2. 研究の目的

高齢者人口が増加し、高齢者のいきがい作り、生活保障など様々な課題が生起している。特に男性に焦点を絞ると、職域での生活が長い場合が多く地域との繋がりに乏しく、定年後の社会参加が難しい。そのような高齢者の健康維持を計るには就労が有益であると思われる。同時に、就労は経済的な支援になる上に、社会的な労働人口の減少という問題も解決しうる方策でもある。

一方、就労希望者は多いが、実際にそれが就労に結びついているケースは決して多くは無い。そこで本研究では、アクティブシニア就業支援センターに着目し、1)東京都内13自治体の同センターの実態と課題、2)高齢者の就労状況と生活実態の縦断調査を実施し、3)高齢期の特性を踏まえた就労支援の在り方についての検討を行う事を目的とする。

### 3. 研究の方法

東京都大田区に開設されたアクティブシニア就業支援センター「いきいきごとステーション」において、求職者の初来所時にアンケート用紙を配布し、その後一定期間ごと引き続いての追跡調査を実施する。初回調査は施設職員による手渡しであり、以降の追跡調査は郵送調査となる。

初回調査項目は基本属性、認知経路、就労希望動機、希望する就労内容や形態、職歴、主観的健康感、精神的健康度(WHO5)、生活機能、暮らし向き等を尋ねる。その後、初回回答者を対象に、継続状況や満足度など心身の健康面、社会・経済面について追跡調査を実施する。求職活動の進展は多様なため、およそ12カ月の期間に6回の郵送調査を実施

する。以上の多変量解析により、就労希望者が就労を継続または中止する予測因子が明らかにする。調査協力者には追跡調査に回答する毎に謝礼を送付し、縦断調査における回答率の維持を図る。いずれの調査においても回答は対象者の任意とする。

### 4. 研究成果

#### (1) 調査結果

返送されたアンケートについて集計を行い、5歳区切りの年齢階級と性別ごとの人数(表1)、最終学歴(表2)、団体への加入状況(表3)、世帯構成(表4)、暮らし向き(表5)、前職の離職理由(表6)、求職理由(表7)、仕事さがしで重視する点(表8)、主観的健康感(表9)について分布を求めた。単一回答の項目については $\chi^2$ 検定により分布の偏りを検討した。また、2項目の比較においては正確二項検定により比較した。

次いで、年齢と暮らし向き、主観的健康感、WHO5(精神的健康状態表)の相関関係について表10に示した。

	男性		女性		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
50-54歳	1	1.4%	2	5.7%	3	2.9%
55-59歳	20	29.0%	4	11.4%	24	23.1%
60-64歳	24	34.8%	13	37.1%	37	35.6%
65-69歳	16	23.2%	12	34.3%	28	26.9%
70-74歳	6	8.7%	4	11.4%	10	9.6%
75-79歳	2	2.9%	0	0.0%	2	1.9%
合計	69	100.0%	35	100.0%	104	100.0%

表1. 性別ごとの年齢分布

対象者の年齢階級の分布について性別ごとに $\chi^2$ 検定を行ったところ、男性( $\chi^2(5)=41.687$ ,  $p<.01$ )、女性( $\chi^2(5)=24.824$ ,  $p<.01$ )ともに有意であり人数に偏りがみられた。残差分析の結果では男性において60-64歳を頂点として50-54歳・70-74歳・75-79歳よりも人数が多く、次いで55-59歳、65-69歳は50-54歳・75-79歳よりも人数が多かった。一方、このような年齢階級間での差は女性では見られなかった。センター利用者は男性と女性で分布が異なることが示された。

また、対象者の性別の人数について正確二項検定を行ったところ、男性69名(66.3%)、女性35名であり、男性の方が有意に多かった( $p<.01$ )。

対象者の最終学歴の分布について $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な人数の偏りがみられた( $\chi^2(4)=69.846$ ,  $p<.01$ )。残差分析の結果、最終学歴を高等学校と回答するものがいずれの回答よりも多かった。この偏りは、A区内で実施された一般高齢者向け調査の回答を期待比率として調整した期待比率不等の

x2 検定においてもみられ、センター利用者は高等学校卒業者が有意に多いことが示された。

表 2. 最終学歴の分布

	人数	(%)
中学校	22	21.2%
高等学校	52	50.0%
短期大学・専門学校	10	9.6%
大学	18	17.3%
その他	2	1.9%
合計	104	100%

対象者の団体への加入状況について、10 肢から複数選択にて回答を求めたところ、「いずれの団体にも入っていない」との回答が 53.8% と半数を超えていた。

表 3. 団体への加入状況 #  
5 名の欠損により 99 名で集計

	人数	%	有効%
町内会・自治会	21	20.2%	21.2%
老人会・老人クラブ	3	2.9%	3.0%
趣味関係のグループ	10	9.6%	10.1%
スポーツ関係のグループやクラブ	13	12.5%	13.1%
ボランティアのグループ	6	5.8%	6.1%
政治関係の団体や会	2	1.9%	2.0%
業界団体・同業者団体	0	0.0%	0.0%
宗教関係の団体や会	5	4.8%	5.1%
その他のグループや団体	3	2.9%	3.0%
いずれの団体にも入っていない	56	53.8%	56.6%

表 4. センター利用者の独居率 #  
1 名の欠損により 103 名で集計

	非独居		独居	
	人数	%	人数	%
男性	47	69.1%	21	30.9%
女性	22	62.9%	13	37.1%
合計	69	67.0%	34	33.0%

対象者の世帯構成について、独居か否かに着目し集計したところ、男女ともに独居率が

30% を超えていた。

表 5. 暮らし向きの分布 #  
3 名の欠損により 101 名で集計

	人数	%	有効%
非常にゆとりがある	2	1.9%	2.0%
ややゆとりがある	9	8.7%	8.9%
どちらともいえない	31	29.8%	30.7%
やや苦勞している	35	33.7%	34.7%
非常に苦勞している	24	23.1%	23.8%

対象者の暮らし向きの分布について x2 検定を行ったところ、有意な人数の偏りがみられた ( $x^2(4)=39.941, p<.01$ )。残差分析の結果、「非常に苦勞している」、「やや苦勞している」、「どちらともいえない」との回答が「非常にゆとりがある」、「ややゆとりがある」との回答よりも多かった。

表 6. 前職の離職理由

	人数	%	有効%
会社倒産・事業所閉鎖のため	8	7.7	10.8
人員整理・勸奨退職のため	10	9.6	13.5
事業不振や先行き不安のため	6	5.8	8.1
定年または雇用契約の満了	28	26.9	37.8
より良い条件の仕事を探すため	4	3.8	5.4
介護・看病のため	5	4.8	6.8
家事・通学のため	1	1.0	1.4
自身の健康上の理由	3	2.9	4.1
その他	9	8.7	12.2
合計	74	71.2	100.0

対象者の前職の離職理由について表 6 に示す 9 肢から回答を求めたところ、71.2% の対象者から回答が得られた。「前職なし」を含む 28.8% を欠損値として扱った。回答では「定年または雇用契約の終了」が最も高かったもの、ポジティブな離職理由は限られている一方、望まないネガティブな離職は多岐に渡っていた。そこで「定年または雇用契約の満了」と「より良い条件の仕事を探すため」をポジティブな離職とし、「会社倒産・事業所閉鎖のため」、「人員整理・勸奨退職のため」、「事業不振や先行き不安のため」、「介護・看病のため」、「自身の健康上の理由」をネガティブな離職として再集計を行った。その結果、ポジティブな離職は 30.7% (有効 43.2%) であり、ネガティブな離職は 30.8% (有効 44.6%) であった。センター利用者の半数は

望まない失業により求職活動を行っていることが示された。

表 7. 求職理由

	%
生活のため	80.8
借金の返済のため	7.7
小遣い程度の収入が欲しい	16.3
健康のため	41.3
生きがいを得たい	34.6
社会貢献・社会とのつながり	27.9
時間に余裕があるから	13.5
家族などの勧め	3.8
その他	7.7

対象者の求職理由について表#に示す9肢から複数選択にて回答を求めたところ、「生活のため」とする回答が80.8%であり突出していた。次いで、「健康のため」、「生きがいを得たい」、「社会貢献・社会とのつながり」との回答が続いた。

表 8. 仕事選びで重視する点

	人数	%	有効%
収入の多さ	12	11.5%	12.0%
通勤の便利さ	19	18.3%	19.0%
職場の雰囲気	13	12.5%	13.0%
自分の能力や経験が活かせるか	33	31.7%	33.0%
勤務日数・時間	23	22.1%	23.0%

#4名の欠損により100名で集計

対象者の仕事選びで重視する点についてx2検定を行ったところ、有意な人数の偏りがみられた( $x^2(4)=14.600, p<.01$ )。残差分析の結果、「自分の能力や経験が活かせるか」との回答が「収入の多さ」との回答よりも多かった。

対象者の主観的健康感についてx2検定を行ったところ、有意な人数の偏りがみられた( $x^2(4)=162.538, p<.01$ )。残差分析の結果、「まあ健康な方だ」との回答がいずれの回答よりも多かった。次いで「とても健康だ」との回答が多く、「どちらともいえない」、「あまり健康でない」、「健康でない」との回答よりも多かった。

表 9. 対象者の主観的健康感の分布

とても健康だ	24
まあ健康な方だ	70
どちらともいえない	8
あまり健康でない	2
健康でない	0

表 10. 年齢・暮らし向き・主観的健康感・WHO5(精神的健康状態表)の相関関係

	年齢	暮らし向き	主観的健康感
年齢			
暮らし向き	-0.216 *		
主観的健康感	0.040	0.070	
WHO5 (精神的健康状態表)	-0.174	0.366 **	0.163

\*;  $p<.05$ , \*\*;  $p<.01$

年齢と暮らし向き、主観的健康感、WHO5(精神的健康状態表)の相関関係について表#に示した。暮らし向きと年齢の間に有意な負の相関関係がみられ( $r=-.216, p<.05$ )。暮らし向きが苦勞しているほどに年齢が若い事が示された。また、暮らし向きはWHO5とも関連がみられ( $r=.366, p<.01$ )。暮らし向きが苦勞しているほどにWHO5の得点が悪く精神的健康度が低いことが示された。

## (2) 考察

本研究では、求職高齢者の社会活動および生活状況と健康面の関連、求職活動と就労意識について検討することを目的として、就労支援機関利用者を対象とした有償アンケートを実施した。

これまでの研究においてみられる就労支援機関利用者の分布と同様に、本研究の対象者においても男性よりも女性が多かった。センターの特徴を反映し利用者の年齢は比較的若く、55歳から64歳までの向高齢者が多くみられた。独居率については、平成24年版高齢者白書において65歳以上の全国平均が男性11.1%、女性20.3%と報告されており、それと比してセンター利用者は独居率が高かった。本研究の対象者は55歳以上だが、年齢の相違を加味してもセンター利用者は独居率が高いと考えられる。最終学歴も比較的 low、いずれの団体にも所属していないものも半数を超えることから、センター利用者は社会的孤立のリスクを抱えている事が伺える。

また、年齢が若く主観的健康感も維持されている一方で、年齢が若いほどに暮らし向きが苦勞していた。暮らし向きは精神的健康度とも関連しており、暮らし向きに苦勞しているほど精神的健康度が低かった。今は比較的若く身体的健康度は維持されているものの、いずれ閉じこもりへと繋がるリスクも抱えていることが示唆される。

センター利用者は社会的孤立および閉じこもりのリスクが高いと考えられることから、就労支援機関の活用がこれらのリスクの予防に寄与する可能性があるとも考えられる。前職の離職理由については半数が望まないネガティブな離職であったことから、比較的若い層を対象とした就労支援機関においては、いわゆる生きがい就労ではなく、必要に迫られ求職していると考えられる。このことは仕事を探している理由として生活のためとする回答が多いことから伺える。一方で健康や生きがい、社会とのつながりを求める回答もあり、仕事選びにおいても収入面は重視されていなかった。センター利用者は暮らし向き悪い中でも就労には収入だけを求めているわけではないことが伺える。仕事を選ぶ際には、能力や経験が活かせることが重要であるという回答が最も多く、収入よりも過去の経験等を活かしたい気持ちがある一方、こうした拘りが仕事探しに影響し、強いては雇用のミスマッチにも影響していることも推察される。

### (3)結論

求職高齢者の生活状況や就労意識の実態を調査した。その結果、就労支援機関利用者は独居率が高くいずれの団体にも所属していないものも半数を超えていた。主観的健康感も維持されている一方で、暮らし向きが悪いほどに年齢が若く、精神的健康度が低かった。今は比較的若く身体的健康度は維持されているものの、社会的孤立および閉じこもりのリスクが高いことが示唆された。仕事を探している理由は生活のためとの回答が多い一方で健康や生きがい、社会とのつながりを求める回答もあり、仕事選びにおいても収入面は重視されていなかった。仕事を選ぶ際には、能力や経験が活かせることが重要であるという回答が最も多く、収入よりも過去の経験等を活かしたい気持ちがある一方、こうした拘りが仕事探しに影響し、ひいては雇用のミスマッチにも影響していることも推察される。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

なし

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 鈴木宏幸、倉岡正高、南潮、藤原佳典. 都市部における高齢者就業支援機関利用者の特徴 基本属性の分布と社会活動・生活状況と健康状態の関連. 日本老年社会科学会第 56 回大会、2014.6.7-8、下呂交流会館アクティブ
2. 藤原佳典、鈴木宏幸、倉岡正高、深谷太郎、野中久美子、小林江里香. 都市部における高齢者就労支援機関利用者の特徴：機関の概要と利用成績の傾向. 第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013.10.23-25、三重県総合文化センター
3. 鈴木宏幸、倉岡正高、深谷太郎、小林江里香、藤原佳典. 都市部における高齢者就労支援機関利用者の特徴：社会活動・生活状況と健康の側面. 第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013.10.23-25、三重県総合文化センター
4. 倉岡正高、鈴木宏幸、深谷太郎、小林江里香、藤原佳典. 都市部における高齢者就労支援機関利用者の特徴：高齢者の就労意識. 第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013.10.23-25、三重県総合文化センター

〔図書〕(計 0 件)

なし

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

### 6. 研究組織

(1)研究代表者

深谷 太郎 (FUKAYA, Taro)

東京都健康長寿医療センター 東京都健

康長寿医療センター研究所 研究助手  
研究者番号：80312289

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

藤原佳典 (FUJIWARA, Yoshinori)  
東京都健康長寿医療センター 東京都健康  
長寿医療センター研究所 研究部長  
研究者番号：50332367  
野中久美子 (NONAKA, Kumiko)  
東京都健康長寿医療センター 東京都健康  
長寿医療センター研究所 研究員  
研究者番号：70511260  
小林江里香 (KOBAYASHI, Erika)  
東京都健康長寿医療センター 東京都健康  
長寿医療センター研究所 研究員  
研究者番号：10311408